



十二潟

じゅうにがた
ガイドブック

目 次

◆ 十二潟ってどんなところ？	1
◆ おすすめコース	2
◆ 十二潟の生い立ちと地形	3
◆ 十二潟周辺の伝承と史跡	5
◆ 阿賀野川蛇行跡	7
◆ 十二潟と新江用水路	8
◆ 十二潟と昔の暮らし	9
◆ 十二潟の生きもの	11



十二鶴ってどんなところ？

十二湯ガイドブックとは

豊かな自然環境を有する十二湯を将来にわたって守り伝えていくためには、多くの方々が十二湯を「地域の宝」として認識することが大切です。そこで十二湯とその周辺の散策を通じて、地域の良さを再発見してもらうことを目的にガイドブックを作成しました。

本ガイドブックは、新潟市の「地域が主役の里潟保全事業」として、新潟市里潟研究ネットワーク会議のメンバーが中心となって作成しました。

十二渴 概要

所在地：新潟市北区平林、
十二、灰塚

面 積：約 5.4ha

水面標高[※]: + 1.6m

※ 水面標高：+1.0m

土地の所有形態：民有地 成因：河跡湖（三日月湖）

十二湯に関する
詳しい情報は
「湯のデジタル博
覧ください」



十二潟へのアクセス

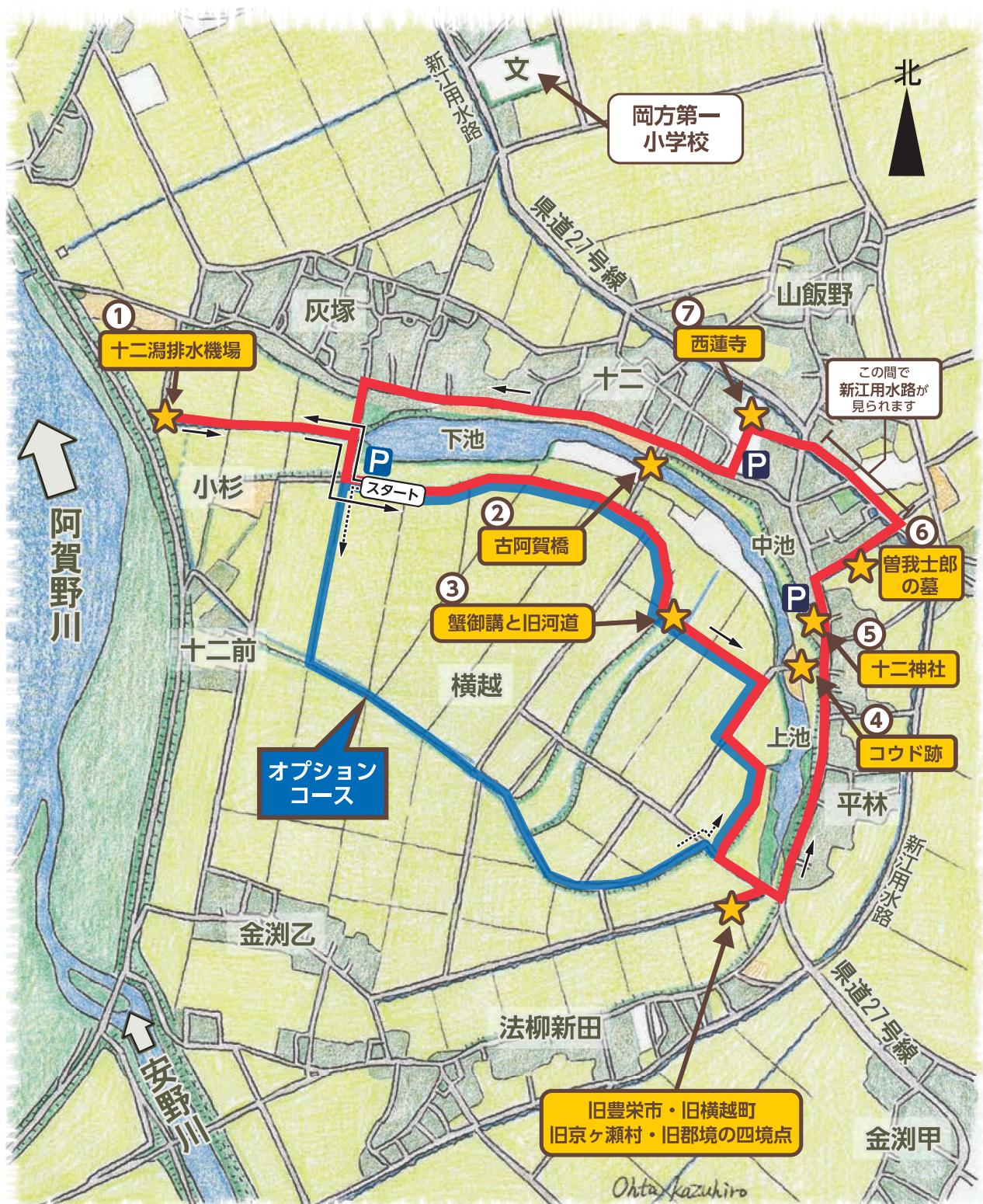


自動車：新新バイパス 濁川 IC から約20分
新潟バイパス 竹尾 IC から約20分
電車：JR白新線 早通駅からタクシーで約20分

十二潟 ふかんず 俯瞰図



おすすめコース



【凡例】

赤線：基本コース

青線：オプションコース

基本コースの所要時間 70 分（全長 4.5km）、
オプションコースを回った場合の所要時間 45 分（全長 2.8km）
※地図上の番号①～⑦については 5、6 ページで紹介しています。



十二潟の生い立ちと地形



1. 阿賀野川の流路変遷

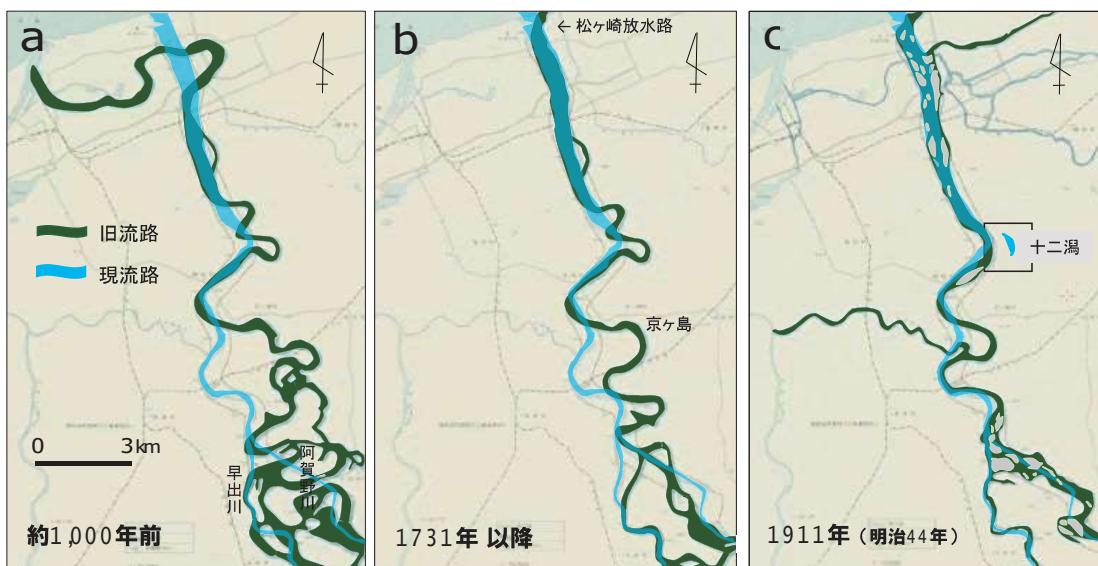


図1 阿賀野川の流路変遷

防災研 水害地形デジタルアーカイブ「阿賀野川」改変

越後平野のような低平な平野を流れる河川は、あちこち流路を変えることが大きな特徴です。約1000年前（図1a）の流路にその様子がよく現れています。こうした流れは、江戸時代の1731年に生じた松ヶ崎堀割の堰の決壊によってかなり落ち着きますが、それでも京ヶ島付近や現在の十二潟に相当する所では大きな蛇行が生じていました。その後、河川改修が進み、明治44（1911）年にはほ

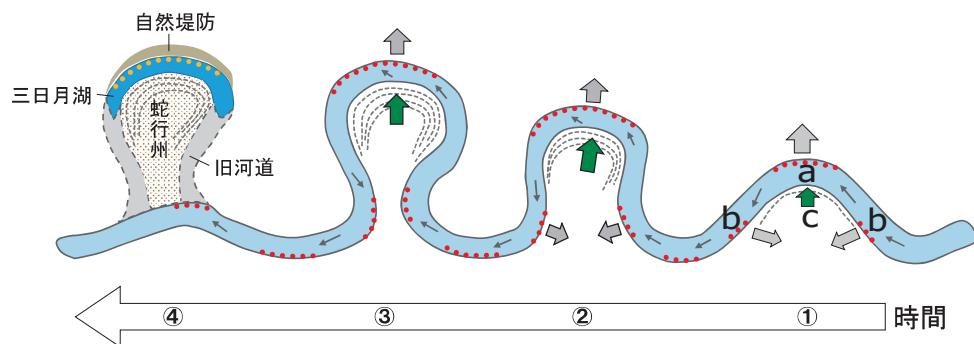
ぼ現在の流路に近づいています。

十二潟がいつできたのか、はっきりとしたことはわかりませんが、文政元（1818）年編纂の『越後輿地全図』には、十二潟のもととなった蛇行がすでに阿賀野川本流から切り離されて描かれています。このことから、少なくとも1818年頃には、十二潟は現在のような姿になっていたと考えられます。



2. 河川の蛇行と三日月湖の形成

図2
河川の蛇行と
三日月湖の形成



十二潟は、阿賀野川の蛇行によってできた三日月湖（あるいは河跡湖）と呼ばれる湖沼です。その形成には、図2に示したような流

路の変化があったと考えられます。小さな赤丸で示した流路の屈曲部は、他の部分よりも侵食力が強くなっています。そのためaの部

分は蛇行の振幅が大きくなるように、b の部分は上流側と下流側が次第に接近するように侵食が進みます。

一方、c の部分は蛇行の振幅が増すとともに砂礫が堆積して、緑の矢印方向に伸長していきます。そして③～④の段階に至って上下

流が連結して蛇行部は流路から切り離されます。こうして、特に河道が深く掘り込まれて淵となった蛇行の最奥部（④黄色丸）が三日月湖、島状に取り残された土地が蛇行州となります。さらに旧河道の外側に自然堤防が形成されます。

3. 十二潟とその周辺の地形の特徴

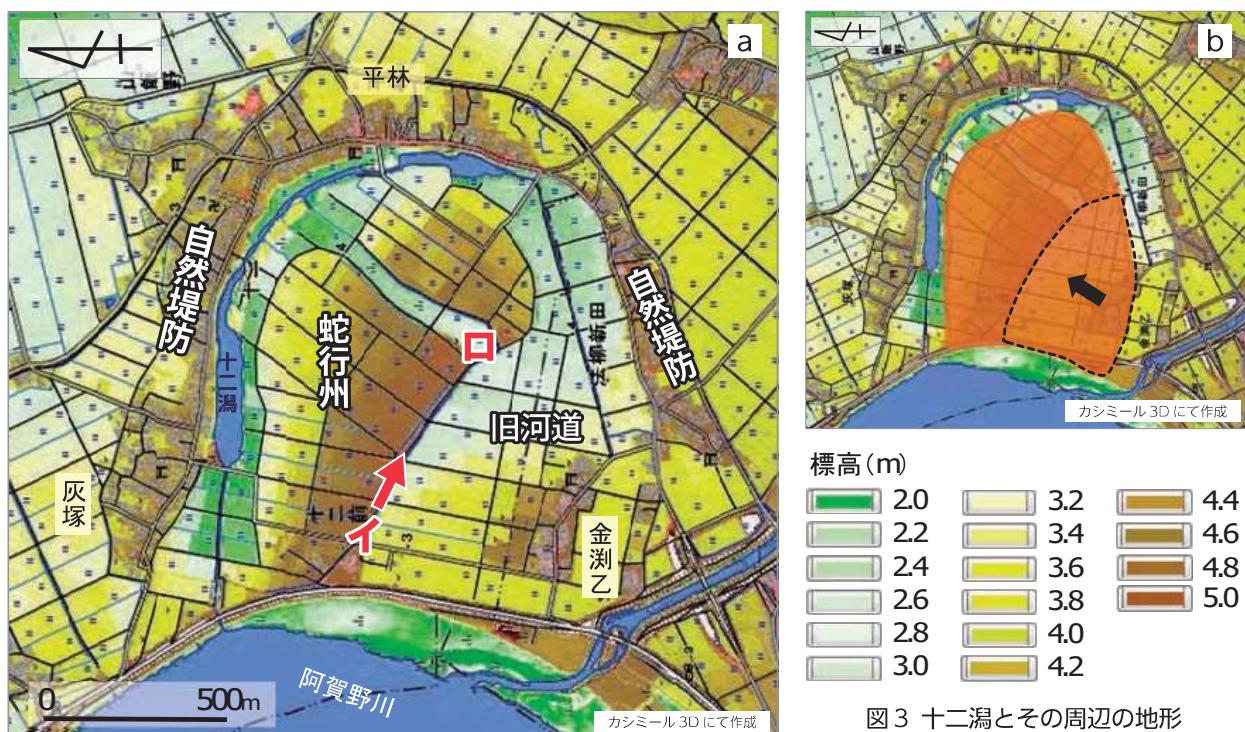


図3aは十二潟とその周辺の地形を示したもので、この図から十二潟が図2のような過程を経て形成された三日月湖であることがよくわかります。蛇行部分の中央部には蛇行州が、その外縁には灰塚、平林などの集落がある自然堤防が発達しています。ところで、この蛇行州は本来図3bに示したような形状だったと考えられます。しかし、その後、河道が矢印の方向（北側）に移動して破線の内側部分が侵食されたようです。そのことは、図3aの地点イから赤の矢印の方向をみると、蛇行州と旧河道との境界が高さ1.5mほどの崖となっていることでわかります（写真）。蟹御講の伝説となっている地点口から十二潟に向かう河道跡も、これと同時にできた可能性が高いとみられます。

阿賀野川や信濃川沿いには、弧を描くよう

な三日月湖がかつては複数存在していたはずですが、現在では十二潟ひとつを残すのみです。阿賀野川の蛇行を示す地形学的にも極めて貴重な湖沼です。新潟市の自然遺産として長く保存していく必要があります。



写真 蛇行州と旧河道の境界の崖



十二潟周辺の伝承と史跡



①十二潟排水機場

十二潟からの排水とその周辺への農業用水を供給する機場です。敷地内には、昭和32（1957）年の「開田碑」をはじめとした石碑が建てられています。



②古阿賀橋

十二潟では、対岸への移動には、綱を手繩りながら舟を移動させる「綱舟」が使用されていました。しかし、綱舟は不安定だったため、昭和12（1937）年7月27日の夕刻に強風が吹いた際に、舟が転覆し2名の人が亡くなりました。この事故を機として、翌年地元有志の協力で橋が架けられ、地元の人たちは大いに喜びました。

その後、老朽化により昭和29（1954）年に現在の農道となりました。



③蟹御講と旧河道

平林村に住む五左工門という悪人が、十二村の人々の善事や神仏を信仰するのをみて憤り、西蓮寺に恨みを持つようになりました。そこで五左工門は、十二村の人々を困らせてやろうと考え、大きく弧を描くように流れていた阿賀野川の流れを、直接西蓮寺にぶつかるように途中から変えて（右図の黄色矢印）、寺を流してしまおうと考えました（10ページ参照）。

五左工門が変えたというこの流れは、実は阿賀野川の旧河道のこと（4ページ参照）、2ページの地図③の地点は、その出口にあたります。



コラム

十二潟をめぐる市町村界の変遷

かつて、横越村は阿賀野川を越えて十二潟の左岸まで張り出していました。明治44（1911）年の地図（a）では十二潟の南端部分（☆印の部分）が、横越、岡方、京ヶ瀬の3村で接していたことがわかります。その後、昭和30（1955）年に岡方村は豊栄町（旧豊栄市を経て現新潟市）に編入されますが、一部が十二潟を越えて横越町に食い込むなど、境界は複雑な形となっていました（b）。現在は、豊栄市と横越町（一部）が新潟市北区、京ヶ瀬村が阿賀野市となり、境界も単純なものになりました（c）。



明治44（1911）年の境界図（a）
明治44（1911）年の境界図（a）



平成12（2000）年の境界図（b）
平成12（2000）年の境界図（b）



令和元（2019）年の境界図（c）
令和元（2019）年の境界図（c）

④コウド跡

阿賀野川がこの地を流れていた頃から三日月湖となった後まで、対岸への移動は舟での行き来でした。その渡し場を「コウド」と呼びます。十二潟にもかつては、各家専用のコウドがありました。1950年代までの空中写真には、コウドの跡が写っています。



⑤十二神社

十二新田村の創村は承応元（1652）年といわれています。当社は『神社明細帳』によれば「北蒲原郡
十二新田鎮守宇内窪 無各社十二神社」とあります。

この地の大庄屋曾我新右衛門家が屋敷内に八幡宮を建立。天明3（1783）年には、屋敷内に諏訪神社が建てられましたが、その後十二神社に合祀。明治41（1908）年には同じく屋敷内にあった稻荷神社を合祀。八幡宮・諏訪神社・稻荷神社はかつて、曾我家の屋敷神であったと思われます。なお、当社は曾我家の屋敷跡に建っています。



⑥曾我土郎の墓

この一角には、曾我日新や曾我土郎など曾我家の墓があります。曾我家は江戸時代、代々この地を拠点とした岡方組48ヶ村の大庄屋（割元・肝煎）です。曾我新右衛門家の墓は西蓮寺にもあります。

曾我土郎は、幕末勤王の志士で、名は佑信、通称長左衛門といいます。
坂井経堂の門に入り塾頭を務め、私財を投じて講武場を開きました。

北越戊辰戦争では、各村の名主や農民を集めて岡方正氣隊（3番隊）を組織し、新発田藩の統制下に属して赤谷・庄内・米沢・会津などを転戦しました。関川村の近郷での戦いでは、地元の庄屋である渡邊家が米沢藩の陣屋であり、曾我家は渡邊家と親戚にあたることから、岡方正氣隊長として「石川土郎」または「曾我長左衛門」と変名を使いました。



平定後は帰村し、村政や県に奉職し、明治23（1890）年に東京で亡くなりました。

⑦西蓮寺

真宗大谷派、山号は松聲山。開山・開基は斎藤兼智です。加賀国（石川県）白山で神職だった斎藤權之頭が蓮如に帰依して法名兼智を賜りました。元和9（1623）年、当地に第10世佑玄和尚が一宇を再興し、正保2（1648）年に本堂を建立。明治11～14年に本堂を大改修し、明治15（1882）年に現在の大伽藍となりました。本堂内の天井絵は、江戸時代の画家北海酔道人（長戸呂村出身）によるものです。なお北海酔道人の碑は、長戸呂の長安寺にあります。





阿賀野川蛇行跡



旧河道



阿賀野川が山地から平野に出た所から下流側に向かって約15kmの区間には、蛇行の跡（旧河道）が数多く残されています。このことから、かつての阿賀野川は流路の移動が激しかったことがわかります。

防災研 水害地形デジタルアーカイブ
「阿賀野川」の一部を改変



かつての十二潟 ①

昭和30(1955)年頃
十二潟と
潟端の田んぼ



十二潟と新江用水路



今から 290 年前の享保 15(1730) 年、阿賀野川の水害を軽減するために、松ヶ崎(現松浜)に堀割と堰が造されました。しかし、翌 16 年の融雪期の洪水により、堰が破壊されて流路が変わり、阿賀野川は直接日本海に注ぐようになりました。これによつて、川の幅が広がり河床も低下してしまいました。このため阿賀野川から取水していた新発田藩の岡方組 53ヶ村の安田、分田、堀越、京ヶ瀬、岡方では田に水を引くことができなくなり、米を作れなくなりました。そこで岡方組がこれを解決するためには幕府に願い出て、用水路の掘削が始まり、享保 19(1733) 年に完成しました。

こうしてできた新江用水路は、三日月形の十二潟を囲むように流れ、岡方・長浦地区や阿賀野市など約 2300ha の水田を潤しています。



昭和 37 年、灰塚地区の新江用水路で遊ぶ子どもたち

昭和 40 年代半ばまで、この用水路は人々の身近な水辺となっていました。現在の新江用水路は、阿賀野市小松地内の阿賀野川頭首工から取水され、総延長約 30.5km に及び、その末端は新潟市北区新崎地区にあります。春には、上流部の水路沿い約 4.6km にわたってソメイヨシノ 550 本が咲き誇る景色は見事です。



新江用水路沿いに咲く桜



阿賀野川

十二潟と昔の暮らし

お話
倉島 穂さん
(昭和 20 年生)



倉島 穂さんと奥様

十二潟の生きものたち

春、阿賀野川の水位が上がるとき、十二潟に川の水が入ってくる。すると綺麗な水と一緒にたくさん魚が入ってきたね。子どもはヤスを持って捕りに行った。イトヨとウナギも潟に上がってきた。ナマズも美味しかったね。潟とつながった細い水路や田の中にはドジョウがいた。ドジョウ屋が日を決めて買いに来たのだけれど、かなり良い値段で買ってくれるので驚いたね。雷魚は味噌漬けにして弁当のおかずとしたよ。雷魚は見た目が魚というよりまるで蛇のようで恐れて食べない人もいたよ。

大人になってから十二潟のバンやカモをとって食べたこともある。バンという鳥はあまり飛ばず、いつもマコモの中にいたんだ。赤ガエルや食用蛙も食べたな。十二集落には三種類の蛇がいた。シマヘビ、アオダイショウ、ヤマカガシ。捕まると屋根の上で干して、輪切りにして焼いて塩をして食べたよ。端午の節供の時に菖蒲湯に入らないと蛇になめられるといわれたね。

4月17日には西蓮寺でガニお講(蟹お講)があった。寺には、数十年前まで境内でカニを売る店がたくさんきていた。他におもちゃ屋などの露店も出て周辺の人々も集まり大変な賑わいだったよ。



水神様

このあたりの水は鉄分が多くてカナクッセ(金臭い)まずい水だった。小学校の脇の水路の水を汲んでリヤカーで運んできたりした。その水は安田から流れてくる水で、きれいで美味しかった。冬の寒い日に手押しポンプのところに小さい棚を作って、ハゲン(里芋の母芋)と小豆を塩味にゆでたものを供えて、「水神様水神様」と唱えた。地下水は大切で、ポンプにはカップに入れた水と塩を供えるなど神棚と同じ扱いをした。昭和35年に水道が通ったのでポンプは埋めてしまった。



河童の話は聞かなかったけれど、潟の中には何カ所か水が湧いているところがあって、そこは気をつけろと言われた。湧いている場所はわかりにくかったけれど、冬に水面が凍らないところがあったので、それでわかった。今では水が湧いているところはないんじゃないかなあ。

蟹 御 講

西蓮寺は真宗大谷派の寺院。石川県白山比咩神社の神職から僧侶となった兼智が富山県に創立しましたが、火災によって焼失したため寛永元（1624）年にこの平林に再興されました。

西蓮寺では昔、4月17日に「蟹御講」という行事が行われていました。「寺御講」ともいって、本堂で読経し、法話を聞く行事でした。境内には四十軒ほどの露店が並び、大変な賑わいだったと言います。中でも蟹を売る露店が名物でした。松ヶ崎浜・福島潟・新井郷川、後に落堀川でとれた、茹^ゆで湯気がホカホカとあがる蟹をトラックで運んできたそうです。齋藤泰住職に伺ったところ、「蟹御講」には二つの伝説があるそうです。

一つは4月17日に十二潟に巨大な蟹が上がったということから。もう一つは十二潟が「魔の渕」と呼ばれていた頃、五左工門という者が享保3（1718）年に怪物と出会った話です。西蓮寺を阿賀野川に流そうと企むほどの悪人五左工門は（「蟹御講と旧河道」参照）漁業の権利もないのに十二潟に網を入れたところ、網の中に大きな笠のような物体が入っているのを見て「怪物が入った」と大変驚き恐れました。そして名主宅へ行って禁を犯したことをお詫びし、西蓮寺住職には教えさとされて西蓮寺の信者となって、村の人たちと共に怪物を魔の渕に放してやり、自分が主催者となって今まで捕らえた蟹（怪物は蟹だった）と魚類のために西蓮寺で大供養を開催しました。それが4月17日だったのです。

そんな伝説のある「蟹御講」でしたが、寺での法要がなくなり、蟹の露店も昭和50年代にはなくなりました。今は綿飴屋さんが一軒出ているだけになりました。



画：高橋 郁丸

かつての十二潟 ②

写真右▶

昭和33（1958）年 中池の橋



かつての十二潟 ③

◀写真左

昭和37（1963）年 新江用水路



十二潟の生きもの（鳥類）



十二潟は、水際にヨシやマコモ、浅い止水域には、ヒシやアサザが生育する豊かな自然がコンパクトに残されていますが、自然堤防上には人家や道路があり人との関わりが大きいことも特徴の一つです。野鳥は、水辺に特徴的な多くの種が一年の間に観察できます。冬には、すぐ近くの阿賀野川の中州に三千羽を超えるコハクチョウや希少なガン類が見られます。



カルガモ

ひなが親鳥について行進する姿で有名。クチバシの先端が目印。



コガモ

小形のカモ。オスは華やかで「ピリッ、ピリッ」と鳴く。メスは地味な羽色。



アオサギ

サギの中でも最も大きく、灰色の羽。小魚やカエル、ザリガニなどを食べる。



ヨシゴイ

夏鳥。ヨシ原に巣をつくる黄褐色のサギで、首を伸ばし擬態することもある。



バン

夏鳥。全体に黒みがありクチバシの先端が黄色で額にかけて赤く目立つ。



オオバン

ツルの仲間で真っ黒な体に真っ白なクチバシとおでこが特徴。



オオヨシキリ

夏鳥で「ギョギョシー」と鳴きヨシ原でなわばりを主張。ウグイスの仲間。



キジ

日本の国鳥。地面を歩いてエサをとり、「ケーン、ケッケー」と鳴く。



ノスリ

ずんぐりしたタカ。カエル、ヘビや鳥を低空飛翔し、ねらいをつけて捕らえる。



シジュウカラ

野にも町にも住み、人家の庭にもやってくるポピュラーな鳥。

十二潟の生きもの（植物）



アサザ

県の絶滅危惧Ⅱ類に指定の貴重な植物で、十二潟では県内最大の群落をつくる。夏には黄色の花が水面を埋めつくすほど見られる。



ガガブタ

アサザと同じミツガシワ科の多年草で、県の絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。8～9月頃に小さくて白い花を咲かせる。



コウホネ

6～9月頃に黄色い花を咲かせる。大きな葉が特徴。



ヒシ

水面に葉を広げる1年草。ひし形はこの植物の葉や種子が由来となっている。



イチョウウキゴケ

水面に浮かぶコケ類。イチョウに似た形をしている。



ケキツネノボタン

田んぼのあぜなどによく見られる。春～初夏に開花する。



ヨシ

水辺に生える多年草。野鳥や小魚などの良い生息場所となる。



チクゴスズメノヒエ

外来種で、岸から水面にマット状に広がるので他の植物が追いやられる。



十二潟の生きもの（魚類）



十二潟が阿賀野川の本流だったころは様々な動物たちが暮らし、日本海からサケやサクラマス、イトヨなどの回遊魚もさかのぼってきました。現在では越後平野のほかの潟と同じく、川や海との行き来ができなくなってしまいました。生息する種類は少なくなりましたが、十数種類の魚類やカメ類、モクズガニなどの水生動物、トンボ類が生息し、水辺には様々な鳥類やほ乳類もやってきます。

掲載種のグループ分け

魚類	両生類
は虫類	ほ乳類
甲殻類	貝類
昆虫類	その他



コイ

おうせい
生活力旺盛で、成長すると全長が80cmを越える。県内で飼育、放流されているのは外来種。



ギンブナ

マブナとも呼ばれ、放流もされている。コイに似るが、ひげがない。ほとんどがメス。



タイリクバラタナゴ

アジア大陸原産。横から見ると菱形で、オスの婚姻色は鮮やか。二枚貝に産卵する。



モツゴ

全長は最大7~8cmほど。口先がとがってやや上向き。西日本からの移入種。



タモロコ

モツゴに似るが、口先は丸みを帯びてひげがあり、尾のつけ根に黒い斑点がある。



ツチフキ

水底で暮らし、砂泥中の小動物を食べている。西日本からの移入種で、平野部で増加。



ナマズ

2対のひげをもち、全長60cm以上に成長。魚やカエルなどを捕食。古い時代の移入種。



キタノメダカ

水面を群れをなして泳ぎ、小昆虫やミジンコなどを食べる。環境省絶滅危惧Ⅱ類。



カムルチー

別名ライギョ。肉食性で、全長1mに達する。朝鮮半島、中国から食用に持ち込まれた。

十二潟の生きもの（その他）



ウシガエル

体長18cmに達する大型のカエル。別名食用ガエル。北アメリカ原産の特定外来生物。



クサガメ

首に黄色線、背甲に3本の稜線がある。越後平野に多数生息するが朝鮮半島、中国原産。



ミシシッピアカミミガメ

目の後方に赤褐色の斑紋がある。北アメリカ原産の問題ある緊急対策外来種。



ホンドタヌキ

里山から人里まで生息。環境適応能力が高く、動物質や植物質など何でも餌とする。



ホンドイタチ

水辺に暮らし、カエルやネズミなどの小動物、水中の魚などを捕らえて食べる。



アメリカザリガニ

5対の脚をもち、第一脚は強大なはさみ状。ウシガエルの餌として持ち込まれた。



モクズガニ

大型のカニで、はさみに毛が密生。カワガニとも呼ばれ、海で生まれ川に上って成長。



カラスガイ

殻の長さ30cmを越す大型の二枚貝。幼貝には翼（よく）が発達する。生息数は減少中。



ショウジョウトンボ

水草が繁る平地の池に生息する。成熟したオスは、全身がまっ赤に変わる。



コシアキトンボ

水草が繁茂する平地の池に生息。オスは腹部の前方が抜けているように白い。



チョウトンボ

ほぼ全身が黒色で後ろ翅が幅広く、チョウのようにひらひら飛ぶ。平野部の池沼に生息。



オオマリコケムシ

直徑数十cmになる寒天質の大きな塊。1.5mmほどの個虫が多数集まって群体を形成。



岡方第一小学校の取組

平成 24 年度に「未来に残そう地域の宝十二潟」というテーマで、6 年生が学習を始めました。岡方コミュニティ委員会、県立植物園園長、北区役所区民生活課など多くの方々のご支援を受け、観察会や外来種駆除など貴重な体験や豊かな交流が行われ、活動の様子は、新聞やテレビで紹介されました。また、「全国川サミット」や「潟シンポジウム」で発表し、地域外に広く知っていただく機会も得ることができました。そして、地域の一員として、貴重な自然と歴史を引き継いでいく子どもたちを育もうと、平成 30 年度より、全学年で十二潟の学習を行っています。「いいいろこ十二潟を守る会」を中心とした手厚いサポートにより年々、学習の幅が広がっています。



NPO 法人いいいろこ十二潟を守る会

十二潟は、地元では「古阿賀」と呼ばれ、魚釣りや農業用水にも利用され親しまれています。平成 19 年度、20 年度に実施した植生生物調査の結果、アサザ、ガガブタの絶滅危惧種の群生をはじめ、動植物 161 種が確認され、潟固有の貴重な生態が残っていることが分かり、岡方地区コミュニティ委員会の環境部会や岡方第一小学校の子どもたちと一緒に保全活動を続けています。

十二潟を次世代に残すために、平成 29 年度に「NPO 法人いいいろこ十二潟を守る会」を立ち上げ、埋め立てが進む民有地の土地を各方面の皆様のご支援を頂き取得させていただきました。

このガイドブックを機会に、十二潟の成り立ちや周辺の歴史に興味をもち保全活動へのご理解を頂ければ幸いです。

NPO 法人
いいいろこ十二潟を守る会
理事長 山崎 敬雄



西蓮寺にお立ち寄りの際には、記念として印が押せます。

◆制作：新潟市・新潟市里潟研究ネットワーク会議

執筆者：澤口晋一（代表）、井上信夫、太田和宏、加藤功、佐藤安男、高橋郁丸、山崎敬雄（五十音順）

◆協力：NPO 法人いいいろこ十二潟を守る会

2020 年 3 月発行